

# 『ネルヴァルにおける分身のテーマ』

——ナルシス的精神の考察——

藤 田 友 尚

## I

ネルヴァルの作品を読むと、同一テーマの偏執的繰り返しに気がつく。なかでも、分身のテーマは、彼の最も偏愛するテーマのひとつであった。

ここでいう分身とは、普通、「ある人物の分身」と言う場合のそれと、意味の上で若干の相違がある。通例、ある人物に姿形が似ていたり、あるいは精神的に深い類縁性を持った他の人物を指して、このように表現するのが一般的であろう。しかし、文字作品のモチーフとして分身を考えてみるなら、ただちにドイツ民間伝承のドッペルゲンガーが想起されるに違いない。ある人間と瓜二つの、幽霊的存在と考えられているものである。ドイツ文学に通曉し、傾倒していたネルヴァルが、この伝承に関心を寄せていたことは明らかで、それゆえ、彼の描く分身はドッペルゲンガーの血統に属していると考えられる。

ネルヴァルの作品以外にも、このような分身をテーマにした作品は少くない。ことに、十九世紀の作品にみるべきものが多い。例えば、ドストエフスキの『二重人格』、ホフマンの『悪魔の霊液』、ポーの『ウィリアム・ウィルソン』、ゴーチエの『二重の騎士』などがそうである。十九世紀に現れたこれらの作品は、近代的な自我の分裂意識を分身という怪物に結びつけたのだった。当時の怪奇・幻想小説の流行と、人間精神の二重性を象徴的に表現しようとする作家の意図とに、分身のテーマはうまく合致していたのである。したがって、これらの作品には、「二重人格に苦悩する人間の姿」とか、「善性と悪性との葛藤」とかいった、分身のテーマの一般的解釈がよく適合する。

だが、ネルヴァルの扱う分身のテーマに、このような常套的・図式的解釈を求めても無益である。なぜなら、彼の分身のテーマには、自我の分裂意識という視点からだけでは捉えきれない部分が残るからだ。それは、「私」という存在に対して、彼が特異な精神作用を働かせているからである。

それでは、その特異な精神作用とはどのようなものか。

ネルヴァルの問題意識は、絶えず「私」という存在に向って集中してゆく傾向がある。彼自身もその点は認めている。しかし、そのような傾向は、客観的な自己認識を求める、といった精神に由来するものでは決してなかったように思われる。彼にとっては、あるべき自己の姿、あってほしい自己の姿だけが重要であった。つまり、ナルシスム的な自己との関係が問題なのであった。

分身のテーマは、このようなナルシスム的精神と最も深く関連しているテーマではないだろうか。なぜなら、自分の分身を見えるという体験ほど、自己の存在を根本的に問題とさせる体験はないからである。

それならば、ネルヴァルのナルシスム的精神がどのように分身のテーマに現れているか、そして、ナルシスムが彼にとってどのような意味を持ち、いかに彼の創造力と関わっているか、という疑問がでてくる。これらの疑問を明

らかにしようとするのが、本論考の目的である。

## II

ネルヴァルの作品に現れる分身のテーマには、二種類の類型が認められる。第一の類型は、主人公が、時間や空間を隔てて自分の眼前に現れる複数の異なった人物を同一の人物と判断する場合である。第二の類型は、主人公が自身自身の分身に遭遇する場合である。本章では第一の類型を取上げ、そこに、いかにネルヴァルのナルシス精神が作用しているかを考えてみたい。

第一の類型に属する作品には、『シルヴィ』、『オクタヴィ』、『ニコラの告白』などを挙げることができる。これらの作品の共通点は、主人公の愛する女性に限定されて、彼女と瓜二つの人物が現れてくることである。『シルヴィ』のアドリエンヌとオーレリー、『オクタヴィ』のバリの女優とイタリアで主人公が出会った未知の言葉を話す女、『ニコラの告白』のジャネット・ルソーとパラゴン夫人やゼフィール。このように、時間や空間を隔てて、主人公の愛する女性と瓜二つの別の女性が、彼の前に出現するのである。

そのとき、主人公はいかなる思いに捉えられるだろう。『シルヴィ』の主人公をみてみよう。

《女優の姿の下で修道女を愛しているのだ！……そして、もしこれがまったく同一の女性だったとしたら——そこには人の気を狂わさんばかりのものがある！》

分身という観念は、複数の異なった人物が同一であると判断されることによって作り上げられる。先の主人公の

「もし」以下に示されている言葉をみるなら、彼が心中ひそかにこのような判断をしているのは明らかだ。にもかかわらず、彼は敢えて分身という言葉を使用しない。その言葉が、主観的判断に基づく、非現実的印象をもつ言葉である、と彼は考えるからだ。つまり、主人公は、現実的であろうと意識的な努力をしているのである。それは、右で引用した言葉の直後にみられる次の言葉にも現れている。

《いけない、現実には立ち帰ろう。》<sup>(12)</sup>

しかし、こうした現実的であろうとする主人公の努力が、逆に、彼がいかに非現実的な思いに誘惑されているかを際立たせている。その非現実的な思いとは、自分の眼前にいる女性が、愛する女性の分身であれば、という願望なのである。先の主人公は、それを仮定的な願望の調子で表現していた。それにまた、『オクタヴィ』の主人公も、この点では変りない。

《私は、一晩中眩惑されるままになり、かろうじて言うことが理解できたこの女性（未知の言葉を話す女）が、実はあなた（パリの女優）自身で、魔法によって私のもとに下り来ったのだと思い描いてみたいという気持になってしまったのです。》<sup>(13)</sup>

このように、第一の類型の分身のテーマでは、主人公の囚われている、女性の分身という非現実的願望が常に問題となっている。

主人公のこうした願望ほど、ネルヴァルの発想の反映を物語るものはない。つまり、分身という観念と愛する女性とを結びつけるという発想である。なぜ、ネルヴァルはこのような結びつきを求めたのだろうか。

ネルヴァルの分身の観念には、彼が深く影響を受けていた輪廻転生という思想が不可分に結びついている。この思想によれば、人間の靈魂は不滅で、次々と転生してゆくという。だから、人間は生れ変わって、幾つもの生が経験でき

ることになる。それは、換言するなら、時間という平面において、一人の人間が複数の存在でありうるということだ。『シルヴィ』の主人公が願ったように、時間を隔てて現われる分身がこの場合である。他方、時間という平面での人間の複数化現象は、アナロジーによって、空間という平面での人間の複数化現象とも結びつく。それが、『オクタヴィ』の主人公が望んだような、空間を隔てて現われる分身である。いずれにせよ、ネルヴァルの分身の観念は、輪廻転生という思想で支えられている。

時間・空間を超越して一人の人間が複数の存在であること、この考え方が、人間の存在の条件を無視しているのは明らかである。それはまた、各々の人間の生はただ一度きりであり、「私」という人間と同じ人間はただ一人としてこの世には存在しないという自明性を否定するものでもある。

ネルヴァルが望むのも、正にこの人間存在の自明性の否定に他ならない。それによって、失われた母親や失恋した相手の女性を、再び取戻そうと彼は望むのである。母親にせよ恋人にせよ、自分の愛する女性が永遠に失われてしまったという現実、彼はそれを認めたくないのだ。だからこそ、分身という観念と愛する女性とを結びつけて、失われることのない愛を得ようとするのだ。

女性と結びついた、こうした分身の観念は、女性に対するネルヴァルの関わり方にある特異性をもたしている。その特異性がどのようなものか、そしてそこに、ネルヴァルのナルシス的精神がいかに反映されているか、このような点について次に考えてゆくことにしよう。

ネルヴァルのように分身の観念に囚われるとき、複数の女性間に共通する肉体的類似性に関心が向うことになる。とりわけ、顔の類似性は重要である。幾人かの女性の顔の類似性は、彼女らの同一性を証明する感覚的に知覚できる証拠である、彼はこう考えるのである。これが、いわゆる「顔の類似の理論」と呼ばれるものである。この理論につ

いて、彼は次のように言っている。

《この理論は、ある種の精神の持ち主に特有のものであって、魂よりも外形に基礎を置く恋愛を示している。》（『ニコラの告白』<sup>(4)</sup>）

ネルヴァルにしてみれば、「顔の類似の理論」は、分身の観念の非現実的要素を取去った、一般向きの説明なのである。それゆえ、「魂よりも外形に基礎を置く恋愛」という言葉を手掛りにすれば、分身という観念に取付かれたネルヴァルが、女性に対していかなる関り方をしていたのか、理解できるのではないだろうか。

「外形に基礎を置く」とは、相手の人間的な内実を無視するということだ。したがって、人間的な感情の相互交流が生れることはない。ネルヴァルが求めたのもその点だった。つまり、一方的に女性に関わってゆくような恋愛であった。それは、女優ジェニー・コロンに対するネルヴァルの恋を思い出させる。

女性へのこのような姿勢が、ネルヴァルに挫折感や失意をもたらすのも当然であろう。『シルヴィ』の主人公のように、恋する女性との感情的齟齬を経験することは避けられないことなのだ。

《あなたは私に『女優の私は、まさしくその修道女なのです』って言ってほしいのですわね。あなたが求めているのはドラマよ。それだけのよ。でも、お望みの大団円にはならないわ。』<sup>(5)</sup>

このように、自己の内的現実が女性のそれと同じだと思いこんで相手に接すること、それがネルヴァルの女性との関わり方の特異性である。

ところで、いま述べた彼の女性との関わり方は、外的世界との関わり方と本質的に同じだともいえる。

《獣の中に、うごめく精神を尊重せよ。》

《『全てに感覚がある!』そして全てはお前の上に力を及ぼす。》(『黄金詩篇』)

ここにみられるのは、アニミズム的世界観である。この世界観は、自然物に対して、人間と同じように精神・意志・感情意識を認める精神状態に依存している。子供や未開人のように、主観的現実と客観的現実とが混同された状態なのである。つまり、自己中心的・一方的に、外的世界と関わりようとする態度である。

しかし、人間である女性を前に、このような自然物に対するように自己中心的で一方的でいられる訳がない。『シルヴィ』の主人公のように傷つくだけだろう。それゆえ、ネルヴァルは、女性が外形だけの存在となること、つまり、自然物のように事物化され、自分の心をそのまま反映させてくれることを願う。そのために、自分と女性との間に物理的距離を設けようとする。

《近くで見れば、現実の女性は私たちの純な心を裏切るのだった。女性とは女王や女神のように見えなければならない、そしてとりわけ、近寄ってはならない存在であった。》(『シルヴィ』)

女性と感情的な相互交流のできない立場にすることで、彼は内的世界で思うがままに彼女を所有しようとするのである。

このように考えてくるなら、ネルヴァルが愛するのは、女性という人間的対象ではなく、事物化された女性に映し出される「私」自身の姿であるのは明白であろう。現実の女性から裏切られたり傷つけられるのを恐れ、彼はただ、自己自身を保護し愛すことしか考えない。自己のナルシスムが充足された状態だけが、彼にとっては快適で幸福な状態なのであった。

こうして、第一の類型の分身のテーマの分析を通じて、われわれは、ナルシスムの充足へと向う、ネルヴァルの

ナルシスの精神を考察することができた。しかしそれは、ほんの表層的部分をみたにすぎない。彼のナルシスの精神はもっと深く、彼の創造の領域と密接に関連しているのである。われわれは次に、第二の類型の分身のテーマを通じて、彼のナルシスの精神と創造との関係について考察をすすめることにしよう。

### III

第二の類型の分身のテーマが、自分の分身に遭遇する人物を主人公としていることは、すでにⅡ章で述べたとおりである。本章ではこの類型に該当する作品として、『カリフ・ハケムの物語』と『オーレリア』とを取上げたいと思う。この二作品には、ネルヴァルのナルシスの精神が創造的な営みとして発展してゆく過程がみられるからだ。これらの作品を検討して、ナルシスムの完全な充足状態への没入が、ネルヴァルの世界を構築していることを示したいと思う。

ナルシスムを問題にする以上、ナルシスの神話を考えてみるのが必要であろう。その神話によると、ナルシスは水面に映った自分の姿に恋焦がれ、憔悴のはてに死んでしまったという。フロイトによって用いられたナルシスムの概念も、この神話に由来していることは周知のごとくである。

ところで、この神話は次のように解釈できる。水面に映る自分の姿は、実体のない単なる「私」の映像でしかない。それは、虚構的な「私」である。一方、それを見つめる「私」は、肉体を備えた現実的な「私」である。虚構的な「私」は、その虚構性ゆえに、美化され理想化される傾向にある。逆に、現実的な「私」は、そのような虚構的な「私」に魅了され、自己の現実的存在感を喪失してゆく。ナルシスに起ったことは、このように解釈できる。したが



って、ナルシスムというのは、虚構的・理想的な「私」こそ本来の自分のあるべき姿であると思ひこみ、それを溺愛する状態と解することができる。

ここで、このようなナルシスの神話をもちだしたのは、これから検討する『カリフ・ハケムの物語』が、この神話を原型としていると思われるからである。まず、この点を明らかにし、ついで、この物語にみられる、ネルヴァルのナルシスムへの傾斜と、その創造的な意義を検討したいと思う。

主人公のカリフ・ハケムという人物に注目しよう。その尊称が示すように、ハケムは絶大な権力を保持する人物である。言わば、彼は世界の中心なのである。その権力を行使して、自分の欲望を無限に満すことができる。このような人物が、人間を超越した自分の姿を夢みたとしても、なんらの不思議もない。

《私はだれも崇めない。私自身が神なのだから！他のものはその影でしかない唯一の、真の、比類なき神なのだから。》<sup>⑧</sup>

神と自分を同一視するハケムは、正に典型的なナルシストとみなすことができる。彼は自分の妹に求婚するが、それも自分の神聖な血を汚すまいというナルシスト的発想が働いている。

しかし、妹への求婚後、ハケムの運命は激変する。彼は謀略に陥り、狂人として投獄される。そして、首尾よく脱獄できたものの、今度は、自分の愛する妹と分身との結婚の現場を目撃してしまう。このときのハケムの精神状態が、極めて興味深い。分身と妹との結婚現場に到る少し前、ハケムは次のように感じる。

《彼は、自分が亡霊の、見えざる精霊の状態で通り抜けているのだと感じていた。》<sup>⑨</sup>

このような体験は、一般に離人症<sup>99</sup>と呼ばれる異常な心理状態であると想像される。彼は自分自身の身体の実在感を喪失し、自分が無になったと感じているのだ。これは、彼が生きているという現実から疎隔してしまったことを示している。

そしてさらに、妹と結婚式を挙げている自分の分身を認めたとき、ハケムは自分の無力さに思いいたる。

《彼は、憤怒の中で、できることなら地震を、洪水を、火の雨を、あるいは何か大変動を起したかった。しかし、地上の粘土の像に結びつけられている自分であってみれば、人間的な方法しか使用することができないのだ、ということのを再び思い出したのであった。》<sup>100</sup>

神であると豪語するほどのハケムが、自分の無力を意識することは、彼の生命力の萎縮を物語るものである。しかも妹を奪う分身に戦いを挑むことなく、その場から姿を消してしまう。

このような、生きている現実からの疎隔、生命力の萎縮、自己無力感、分身への敗北的態度などは、すべて、ハケムが自分の生への執着を捨て去ったことからきている。この自己破壊性の裏面には、自分の分身を存続させたいというハケムの願いがある。分身は、妹との結婚というハケムの願望を実現している。つまり、ハケムにとっては、理想的な「私」の姿なのである。ナルシストであるハケムは、分身を攻撃することによって、理想的な「私」を傷つけることができなかったのだ。それどころか、その理想的な「私」の姿に、現実的な「私」であるハケムが深く魅惑されたのである。このように、ハケムは、ナルシス同様虚構的な「私」＝分身に滅ぼされてしまうのである。

このハケムと彼の分身との関係はど、作者自身の運命を暗示するものはない。ハケムにとって、妹との結婚を意識することは、自分の内にある未知の自分に気がつくことであった。未知の自分への意識が、虚構的な「私」と現実的

な「私」との分裂をハケムにもたらした。そこには、作者の狂気に囚われた「私」と理性を取戻した「私」との分裂状態が反映されている。これを、ネルヴァルの幻想的自我と現実的自我の分裂と呼んでもいいだろう。それゆえ、『カリフ・ハケムの物語』では、幻想的自我は分身を通じて、現実的自我はハケムを通じて、それぞれ表現されている。

ネルヴァルは、狂気によって幻想的自我に覚醒し、ハケム同様、その魅力に誘惑されていた。その魅力とは、潜在的な能力を拡大し、果しく想像力を飛翔させている、もう一人の「私」の姿なのである。今まで未知であった幻想的自我が、幻覚や夢を通じて、隠された自分の可能性をネルヴァルに教えたのである。

しかし、ただこうして幻想的自我にネルヴァルが魅了されていただけではない。彼は、それを、創造力の根源として発達させ、洗練させたものではなかったろうか。その点を、『オーレリア』に語らせよう。

『カリフ・ハケムの物語』とは逆に、『オーレリア』では、作者の幻想的自我の意識は主人公に、そして現実的自我の意識は分身に、それぞれ認められる。そして何よりも興味深いのは、幻想的自我の肥大がみられる点である。それを、主人公と分身との関係に探ってみよう。

『オーレリア』第一部第三章で、主人公の友人が、彼とまちがえて、彼の分身を衛兵詰所から連れ出す場面がある。そのとき主人公は、騒ぎ立てるといふ行動で積極的に自己の存在を友人に訴える。しかし、彼のこの行動も周囲の人から抑えられてしまう。このような主人公の自己主張の激しさは、分身と愛する女性との結婚の場面で絶頂に達する。

《すると直ぐに前後を弁えぬ昂奮が私を襲った。私は皆の待っている男が私の分身であり、彼がオーレリアを妻とすることになっているのだと想像し、怪しからぬ振舞いをして一座を茫然とさせたらしかった。》<sup>12</sup>

主人公の挙動が、分身に対して攻撃的であるのが目立つ。しかし、ここでもまた、主人公の行動は周囲から非難され、制限されてしまうのである。このように、『オーレリア』の主人公は自己主張が激しく、分身に対して挑戦的である。と同時に、それに対する周囲との摩擦も少からずあるということだ。この主人公に比較すれば、分身の方は、周囲の人々の支持や助力を得た人物である。他人との調和の中で受け入れられる社会的性格が、分身にはみられる。

主人公と分身とのこのような対照的性格は、次のように考えることができる。すなわち、作者の幻想的自我が肥大し、周囲との関係が不和になっている状態なのである。

前述したように、『オーレリア』では、ネルヴァルの現実的自我の部分を分身が代表している。それは、分身の非攻撃的態度や社会的な協調性が示すように、他人への配慮を意識した、表層的な「私」の部分である。それに対して、ネルヴァル自身によって生きられている内的現実がある。言うまでもなく、幻想的自我の部分である。ネルヴァルには、自分の本来あるべき姿がこれなのだ、と思われた。その結果、幻想的自我は強大になり、現実的自我の生命力を奪おうとしているのである。幻想的自我の肥大は、次の一文が示すように、現実感覚の一種の麻痺を生じさせている。

《もっとも、なぜ自分でこの病氣という言葉を用いるのか我ながらわからぬのである。》(『オーレリア』)

幻想的自我の発現を狂気と呼ばれることに、彼は我慢がならないのである。

このような幻想的自我の肥大は、ネルヴァルにとってどのような意味をもっているのだろうか。

幻想的自我に囚われた彼は、平凡な日常的現実が一変するのを体験する。つまり、世界を変容させる作用こそ、幻

想的自我の最大の力なのである。

《自然の中的一切が新しい様相を帯び、秘かな声が草木から、動物から、最も微々たる虫類からも洩れ出て、私に告げ私を鼓舞するのであった。》(『オーレリア』)

幻想的自我に没入することで、ネルヴァルはこのような世界の変容を体験してゆく。

幻想的自我への惑溺は、自分が神と同等の立場にいるという、創造者としての彼の理想状態をもたらす。彼は、自分の思うがままに世界を変容させ、自分に従属させるのである。

《私は神にもろもろの出来事を少しでも変えてほしいと願いはしない、事物に対する私のあり方を変えてほしいと思う。私のまわりに私の属する一つの宇宙を創造する力を、私の永遠の夢にただ忍従するのではなくかえってそれを支配する力を、残してくれるよう願う。そうすれば、確かに、私は神となるだろう。》(『逆説と真理』)

彼の言う「事物に対する私のあり方を変え」る力こそ、幻想的自我であることは、今や明らかである。ナルシスの神話の解釈のところで示したように、虚構的な「私」＝幻想的自我を溺愛する状態がナルシスムであることを考えれば、ネルヴァルの求めた幻想的自我の肥大は、ナルシスムの完璧な充足状態への願望といえる。それが、自己閉塞的世界であるの言うまでもない。彼は、書くという行為を通じて、その閉塞的世界に没入していったのである。

#### IV

ナルシスムの完璧な充足状態は、幼児的世界と同じである。

幼児は、ある面で、自分の世界に君臨する全能者である。自然物も玩具も、彼にかかれれば生き生きとした生命を帯び、彼に従属するものとなる。彼はまた、プロテウスのように変化自在で、何にでもなれるのである。この幼児的世界には、ナルシスムの完璧に充足された状態がある。

しかし、成長するにつれて、幼児は次第にその全能者の座を追われてゆく。現実が、彼を脅かす。ネルヴァルのような感受性の鋭い人間にとって、それは苦悩の連続であつたろう。母親を亡くし、父親から理解されず、また女優への恋も実らなかった。文学者としての名声も充分確立せず、生活は困窮した。

このような欠如感と挫折に満ちた現実を前に、ネルヴァルは、もう一度あの幼児的世界での全能感を取戻したいと願う。現実において全能者になれないなら、精神的に現実を支配してやろうというのである。

現実だけではない。彼は現実を支えている生の原理をも支配しようとする。生の原理とは、無秩序であり、流動的なものである。つねに変化し進化してゆく。これに対して、支配することは、死の原理を押しつけることである。つまり、秩序であり、固定的で、変化しないものの原理である。彼は次のように言う。

『私は夢を固定し、その秘密を識ろうと決心した。私は心に言った。「何ゆえに、我が全意志力を揮って遂にこれらの袖秘の扉をこじあけ、己れの感覚を受け入れてばかりいる代りにそれを支配しようとしなのか。』』（『オーレリア』）

夢という、最も生の原理にふさわしい現象を支配すること、それは夢を殺すことである。こうして、ネルヴァルはありとあらゆるものを支配したいと願うのである。

このような、死の原理に基づく欲求こそ、ナルシスムの完璧な状態へとネルヴァルをかりたてるのである。

註(1) G. de Nerval, Œuvres complètes, texte établi, présenté et annoté par A. Béguin et J. Richer, «Bibliothèque

- de la Pléiade», 1974, Gallimard, tome I, p. 247.
- (2) Ibid., p. 247.
- (3) Ibid., p. 288.
- (4) G. de Nerval, *Œuvres complètes, texte établi, présenté et annoté par A. Béguin et J. Richer*, *Bibliothèque de la Pléiade*, 1978, Gallimard, tome II, p. 1079.
- (5) Nerval, op. cit., tome I, p. 271.
- (6) Ibid., p. 8.
- (7) Ibid., p. 242.
- (8) Nerval, op. cit., tome II, p. 365.
- (9) Ibid., p. 389.
- (10) 「自我意識の障害の一つ。『周りを見てもビッターこなじ』『もぬけのからになった』など自己の心的機能の活動にたいする現実的実感が喪失し、そのため外界の認知は生々しさを欠き不自然に感じられ、また自己の行動、感情についても能動の実感がなく不安、焦躁をきたす。」園原・柿崎他監修『心理学辞典』（ミネルヴァ書房刊、昭和50年）による。
- (11) Nerval, op. cit., tome II, p. 390.
- (12) Nerval, op. cit., tome I, p. 384.
- (13) Ibid., p. 359.
- (14) Ibid., p. 403.
- (15) Ibid., p. 435.
- (16) Ibid., p. 412.

（尚、訳は『幻視者』入沢康夫訳・現代思潮社刊と、『ネルヴァル全集Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』筑摩書房刊とをさせていただいた。）